

3歳児の仲間関係の形成過程に関する研究

松丸英里佳*・吉川はる奈**

キーワード：仲間関係、3歳児、観察調査、形成過程

I 問題と目的

1 現代小学生にみる友だち関係の問題

「すぐに手がでる」「かっとなる」一方で、幼児のように「大人に甘える」、「大人と遊びたがる」など、小学生が友だちと遊ぶ姿に不安を指摘する者は多い。学校現場では、子どもが友だちと「うまく」けんかができない姿を指摘する。「かっとなって」自分を抑えられない子どもや、すぐに手がでてしまう子ども。自己コントロールが苦手で、相手を攻撃するという一方的な関係になりがちで、相互に理解することが困難だというのである。

一方、放課後の遊び場では、松丸(2006)によれば、大人と遊びたがる小学生、大人と1対1で遊ぼうとする小学生が目立つという。彼らの遊び場面のエピソード分析では、友だち関係のよろさや、友だち関係の狭さが特徴としてあらわれている。

放課後の遊びの問題については、岡田(2008)は、どのように時間を使うかが重要で、自由に使える時間が子どもに与える影響が大きいと指摘する。実情は魅力的な放課後の時間を見出せない、そのような活動がない、たいくつな放課後を過ごす小学生が多いという。吉川(2008)

は、放課後の遊び場や教育の場で、気になる小学生を育てていくためには、彼らの活動や遊びのプロセスについていねいに読み取り、何ができ、何を求めているのか肯定的に理解されることが重要であると指摘している。ひとりひとりの、その存在を大切にしていくことこそが彼らの育ちを支援する場を作り上げていくことにつながると強調する。

2 幼児期の仲間関係の重要性

“仲間”とは、自分と年齢が近く、身体的にも心理的にもまた社会的にも類似した立場にあるものである。子どもにとって仲間とはどのような意味をもつか。子どもの社会的発達における仲間関係の役割については、乳児期を対象にしたものを含め、多くの研究がなされてきた。

例えば、乳児期の子どもの仲間関係の研究から、乳児は機会さえあればかなり早期から乳児同士相互作用しあうことが示されている。川井ら(1983)によると、乳児期の仲間関係のもつ役割とは、「その相互作用を通して自己や他者の認識を発達させること、そして大人との間には生じにくい多様な情緒の発生をみ、発達させ、その統制を学ぶこと」であるという。しかし、一般的な家庭環境のもとでは、乳児同士の持続的な仲間関係は日常頻繁にみられるものではなく、乳児期を対象とした仲間関係の研究は1980年代ごろになってようやく活発になされるよう

* 埼玉大学大学院教育学研究科修士課程

** 埼玉大学教育学部家政教育講座

になったといわれている。

幼児期に入ると、この自己の発達や、付き合い方の獲得を背景に、社会的世界を少しずつ広げていく。まずは近隣の幼児との遊びという形で、そして3、4歳を過ぎると保育園や幼稚園という仲間集団の一員となることによって、仲間が社会的発達に果たす役割も大きくなっていくという。幼児期における仲間との相互交渉が、子どもたちの社会的な力の発達に果たす役割としては、①他者理解・共感、②社会的カテゴリーの理解、③社会的規則の理解、④コミュニケーション能力、⑤自己統制能力などがあげられている。幼児期では特に、いざこざ場面における子ども同士の相互交渉を重ねることが社会的発達に大きく影響することが示唆され、いざこざ場面に焦点を当てた研究がこれまでも数多く行なわれている。

3 社会集団の場としての幼稚園の役割

幼稚園の入園は幼児にとっては、はじめての社会集団への参加である。家庭と異なる場で、家族から離れ、初めてのメンバーで、保育室(クラス)という場で時間を過ごす。物理的環境としても、人的環境としても互いが初めての体験となる場である。母との分離に不安を抱き、登園をしぶる幼児もいる。社会の中で仲間と出会い、自分の場を作っていく最初の集団である。周りの支えを得て、仲間関係を形成していくことは、幼稚園がもつ1つの役割であろう。

生涯発達の視点で子どもの仲間関係を捉えると、仲間との様々なやりとりの中で、対人関係の基盤を培うのが幼児期であり、園は初めての社会集団として子どもが馴染んでいく場である。したがって、園から小学校への移行について考えるとき、仲間関係の問題を抜きにすすめられない。

児童期・青年期になると、仲間関係に大きな変化が生じる。井上ら(1997)によると、それは、仲間との偶発的な相互交渉を超えた持続的な関係をもつ友人関係の出現であるという。そ

して児童期から青年期にかけてこのような親密な友だち関係を発達させることは、その後の恋愛関係や夫婦関係を形成する基となると考えられている。

本論では、幼児期の仲間関係、とりわけ3歳児が入園を通してはじめて仲間とであり、仲間関係を形成していく過程に着目し、その特徴を明らかにしていく。それをふまえ、児童期・青年期の子どもの対人関係の発達について示唆をえたい。

II 方法

1 対象

A市内の公立幼稚園3歳児クラスに在籍する幼児(以下3歳児)30名

3歳児、4歳児を対象として行った調査のうち、本論では紙面の都合上、3歳児の結果について考察を行う。

2 方法

日常の保育の場面で生じる仲間関係の観察を継続的に行った。観察記録は観察者がその場でフィールドノートに記録した。観察で記録したフィールドノートを解釈的に読み解きながら、エピソードとして文章化し、それぞれについて省察を行った。省察については、観察を重ねながら日を置いて何度も見直しを行った。また定期的に保育者の確認を得ることで、恣意的な偏りがないよう検討した。

3 期間

2008年4月～7月 週1回

III 結果と考察

1 エピソード一覧

観察では現段階で全35のエピソードを得、それぞれにタイトルを付けた(表1)。また、対人関係の発達という視点から、エピソードごとに

キーワードを挙げた。キーワードは、1つのエピソードの中いくつか含まれる場合もあり、それについては複数挙げている。

表1 エピソード一覧

No.	タイトル	キーワード
1	先生の膝の上でおしゃべりをするカズオ	不安な気持ち、先生とかかわる
2	不安いっぱい タオルを離せないリュウタ	不安な気持ち
3	からだを動かして遊ぶケンタ、マサミ、タカオ	からだを使ってかかわる
4	先生と自分の世界に入り込むカナコ	先生とかかわる
5	先生とお腹でコミュニケーションをとるヒロト	先生とかかわる
6	気になる友だちに話しかけるマサト	気になる友だち、話しかける
7	アイコと一緒にいたいヨシオ	気になる友だち
8	「ばいばーい」友だちに呼びかけるショウタ	気になる友だち、話しかける
9	大好きな先生に不安な気持ちを伝えたタクミ	不安な気持ち、先生とかかわる
10	みんなの踊りを傍観するケイタ	不安な気持ち、傍観する
11	友だちと同じでうれしいユキナ	友だちと同じ
12	同じものに気付いて話しかけるタクヤ	友だちと同じ、話しかける
13	みんなでゴロゴロ気持ちいいケイスケ	友だちと寝転がる
14	友だちを抱っこするハルカ	抱っこする
15	先生と円を作った10人	先生とかかわる
16	仲間に入れてあげるジュンヤ	仲間入り
17	みんなでゴロゴロ気持ちいいカヨコ	寝転がる
18	きまりを教えてあげるハルオ	教えてあげる
19	おそろいのマントで遊ぶショウタ	同じもの
20	からだをつなげて遊ぶ4人	寝転がる、つながる
21	「こういえばいいんだよ」教えてあげるユウヤ	教えてあげる
22	名前を呼び合っでうれしいマナ	名前を呼ぶ
23	「やめて！」泣いて訴えるハルキ	いざこざ、泣く
24	「いっしょだよ」から遊びが始まるアヤコ	同じもの
25	友だちとじゃんけんをするミサコ	じゃんけん
26	「一緒に食べようね」お弁当の約束をするショウ	一緒にいたい友だち
27	ブロックを片付けてあげるリョウコ	手伝う
28	どうしても入れてほしいカズヤ	いざこざ、思いを伝える
29	リョウと一緒に座りたいタケシ	一緒にいたい友だち
30	自分から席に座れないヨシオ	不安な気持ち
31	ブロックを崩されて泣いたシンゴ	いざこざ、泣く
32	友だちにかまっでほしいマサヒロ	気になる友だち、拒絶する
33	「貸してよ！」ことばで伝えるヒロコ	いざこざ、ことばで伝える
34	向かい合っでしゃべりを楽しむサキ、ミナコ	仲良しの友だち、おしゃべりする
35	同じものをきっかけに遊び始めたマイコ	同じもの

表2 カテゴリー分類

カテゴリー	キーワード例
保育者と関係を築く	不安な気持ち、先生とかかわる
友だちに関心をもつ	気になる友だち、話しかける
友だちに近づく	一緒にいたい友だち、おしゃべりする
友だちと対立する	いざこざ、思いを伝える

2 カテゴリー分類

抽出したキーワードを仲間関係形成にかかわると予想される場面ごとに分類を試みた(表2)。その結果、①「保育者と関係を築く」、②「友だちに関心をもつ」、③「友だちに近づく」、④「友だちと対立する」という4つのカテゴリーに分類した。

3 各カテゴリーの特徴

観察したエピソードをもとに、各カテゴリーの特徴を述べる。

①「保育者と関係を築く」

入園当初は、不安な状況の中で保育者に助けを求め、駆け寄っていく子や、ひとりじっと耐えている子の姿をみることができた。保育者は、様々な形で不安な気持ちを出す子どもたちを受け止め、集団とのかかわりや、必要であれば1対1の丁寧なかかわりを繰り返し、自ら子どもたちの心理的安全基地となるよう、子どもたちと信頼関係を築いていた(エピソード①)

②「友だちに関心をもつ」

子どもたちは、自分自身の事だけでなく、自分の周りの子へ目を向けるようになっていった。園での生活の流れにも見通しがもてるようになってきている様子だった。近くにいる子の様子をじっと見つめたり、一斉活動の際に、集団から離れて、保育者の様子や活動している子どもたちの様子をひとり傍観している姿もみられるようになった。また、自分の関心のある子へ一方的に話しかけたり、言葉を交わすことはなく

ても、どこへいくにも一緒に行動しようとする(エピソード②)姿もみられた。この時期は、他の子どもや遊び、もっているものなどに関心は示すものの、直接的にかかわることは少なく、仲間入り場面でのいざこざや、ものの取り合いなどの対立はほとんどみられなかった。

③「友だちに近づく」

自ら友だちとかかわろうと近づいていく姿がみられるようになった。園の生活にも慣れてきた様子である。気の合う友だちで集まって遊ぶことも多くなり、同じテーブルで製作をしたり、からだを動かしたり、触れ合ったりしながら遊ぶ子どももでてきた。また、お弁当が始まると、誰の隣で食べるか、どこの班で食べるか、ということに気にする子がでてきた。お気に入りの友だちができ、自分の隣に招いて座らせるなどの姿が徐々にみられるようになった(エピソード③)。

④「友だちと対立する」

仲間とのかかわりが増え、いざこざがみられるようになる。ブロックを崩されたり、教室を走っている子とからだがぶつかったりしたことがきっかけであるいざこざがあったが、自分の隣の席に座る友だちをめぐって、主張し合い、いざこざが生じる場面がみられるようになった(エピソード④)。このような場面では、自分の意見を言葉で強く主張できる子に対して、言い返すことができないことや、我慢してしまうこともしばしばあったが、泣きながらも自分の意志を伝えたり、保育者の助けを借りながら、自分の気持ちを言葉にしたり、友だちの気持ちを受け止めたりしていく姿もみられた。また、言葉以外の方法で、自分の意思を表現する様子もみることができた。泣くだけでなく、無視する、聞こえないフリをすることで、自分の意思を表していた。

「保育者と関係を築く」エピソード①

先生とお腹でコミュニケーションをとるヒロト（3歳、男児、教室）

自由保育の後、子どもたちは円になって席に座り、ジュースを飲む。ヒロトがジュースを飲んでいると、先生は、すぐ側にしゃがみこんで、ヒロトのお腹に耳を当てて、話しかけている。「もしもし、ヒロト君のおなかですかー？」ヒロトはジュースを飲みながら、うれしそうに自分のお腹と先生の会話に耳を傾けている。

（省察）

ジュースの時間は、入園したての子どもたちが幼稚園生活で楽しみにしていることのひとつである。自由保育の時間とは比べ物にならないほど、子どもたちは落ち着いて席につき、ヒロトもうっとりとした表情でジュースを飲んでいる。そんなリラックスした時間の中、ヒロトは先生とのあたたかいコミュニケーションで、さらに気持ちを安定させているようであった。

「友だちに関心をもつ」エピソード②

アイコと一緒にいたいヨシオ（3歳、男児、教室）

何をするにもものんびり、マイペースなアイコ。トイレの時間も、最後まで教室の中に残っていた。すると、ヨシオが近づいてきて、アイコの隣りに座った。2人は会話をするわけでもなく、しばらくの間教室の真ん中に腰を下ろしていた。

先生に促されてトイレも終わり、運動会の練習のために外へ行くことになったヨシオはアイコの顔を覗き込んで目を合わせ、アイコのペースに合わせて外へ歩き始める。給食の時間になると、ヨシオは、アイコがどこへ座るのか気になって、なかなか自分の席をきめることができない。先生に空いているところに座るよう促されると、「アイコはどこに座るの？」と何度も聞いている。ゆっくりと準備をして席に着いたアイコを見つけると、隣の席に座りにっこりと笑いかける。

（省察）

ヨシオは、アイコが気になって仕方ないようで、この日は何をするにもアイコの隣にいたがった。言葉を交わすわけでもなく、ヨシオが笑いかけてもアイコから反応があるわけではないのだが、関心があり、近くにいたいという気持ちを抱いているようだ。入園直後は、友だちが気になっても離れて傍観することが多かったが、5月に入ると、ヨシオのように、友だちにくっついて行動する場面もみられるようになった。

しかし、ヨシオのアイコへの関心は、この後1週間ほどで薄れ、また他の女兒にくっついて行動する姿が観察されている。ヨシオは、自分の関心の向くままに行動し、相手の反応は関係なく、一方的にかかわっているようだった。

「友だちに近づく」エピソード③

リョウと一緒に座りたいタケシ（3歳、男児、教室）

お弁当の時間、空いていた席にカズキが座ろうとする。すると反対側に座っていたタケシが、「ここは、リョウくんだから、だめだよ！」とカズキが座るのを断わる。カズキはすぐに別の席をみつけて座る。タケシは教室をきょろきょろと見渡し、お弁当の準備ができたリョウを見つけると、「リョウくん、ここだよー」と大きな声で呼んで、自分の席の隣に座らせた。

（省察）

お弁当の時間に慣れてくると、今度は、「だれと一緒に座るか」ということに関心が出てくる。子どもたちの中には、お弁当の時間の前から、「一緒に座ろうね」と席の約束をする子もみられるようになった。

タケシはお気に入りのリョウと一緒に座るために、他の子が座るのを拒否して席を空けておくなど、特定の友だちへの強いこだわりが伺えた。タケシのリョウへのこだわりは、2学期が始まってからもなお続いており、興味や関心があるというだけでなく、かかわりの中でリョウへの思いを強め、大好きな友だちと一緒にいたいという思いが芽生えていることが示唆される。

「友だちと対立する」エピソード④

どうしても入れてほしいカズヤ（3歳、男児、教室）

お弁当の時間、早く準備できたサトシ、タロウ、マサト、タクミが同じ班に座っていると、遅れてカズヤがやってきた。

4人の座っている班の目の前に立って、「ここがいいよー」と言うが、1つの班には4人しか座れないことになっているため、4人は困った顔をしている。「どうしても、ここがいいの！」カズヤが、今にも泣き出しそうな顔で言うと、サトシは何も言わずに自分の荷物を持ち、まだだれも座っていない後ろの班に席を移した。カズヤは、空いた席に座って満足しているようだった。

（省察）

お弁当の時間の前まで一緒に遊んでいた4人。そのまま仲良く揃って班に座るが、そこにカズヤがやってきた場面である。カズヤは、サトシが去った後、何もなかったかのように空いた席にさっと座っている。また、一緒にいた3人も、サトシがいなくなってからすぐに、カズヤも入れて楽しそうに遊び始めている。一緒に座りたい友だちがいるために生じたいざこざだが、カズヤにとって、自分が入りたいグループの中に入ることができれば満足であり、そのグループの中にいたサトシの存在については特にこだわりがないようである。譲ってくれたサトシの気持ちになって考える力が十分に発達していないためか、カズヤに悪びれる様子はなく、3歳児の特徴的なエピソードだといえる。

4 3歳児の仲間関係の形成過程

以上の結果から、次のような3歳児の仲間関係の形成過程の特徴が明らかとなった。

(1) 保育者とのかわりかきで気持ちを安定させる

入園当初の3歳児クラスは、あちこちで泣いている子どもがみられたり、一方、不思議なほどに静かになったりと、終始落ち着かない雰囲気であった。入園当初のカテゴリー分布をみると（表3）、「保育者と関係を築く」ことに集中して表出していることがわかる。入園したばかりの子どもたちにとって、保育者の存在が非常に大きいということであろう。子どもたちは、初めての園での生活で、不安な心的状態におかれていると考えられる。入園当初の子どもたちが抱く不安要因については、先行研究によれば、親と離れている不安、新しい環境（生活）に対する不安、まわりの子どもに対する不安など、様々な不安要因があり、このような不安を解消するために、保育者に近づきたい、話を聞いてほしい、抱っこしてほしい、といった子どもたちの姿がみられたと考えられる。

子どもたちの気持ちを安定させるためには、保育者の存在が非常に大きいことを改めて知るとともに、子どもたちがまわりの子へ目を向け、

仲間関係を築いていくためにも、保育者の役割が重要となっていることが示唆された。

(2) 友だちに関心をもち、友だちの様子を知る

保育者との信頼関係を基盤にして、子どもたちは自分以外のまわりの友だちへと関心を広げていく。気になる子にくっつく、近づいていく、隣になる、話しかける、遊んでいる様子を傍観するなど、一方的・間接的な方法で友だちとかわっていることが明らかとなった。

子どもたちは、仲間と一方的・間接的にかかわりながら、一緒にいて楽しそうな友だち、気の合いそうな友だちなど、クラスの仲間の状況をつかんでいったと考えられる。同時に、教室内のあちこちに広がる遊びの中から、自分の好きな遊びや、やりたいことを見つけているようである。このような仲間への思い、遊びへの思いを高め、やがて「一緒に遊びたい友だち」として、直接かかわってみたいという意欲を育てていくと考えられる。

この時期の子ども姿は、周囲からみると仲間とうまくかかわることができていないようであるが、友だちと関係を築いていくための1つのステップとして、大切な時期であるといえる。仲間関係を広げ・深めていくために必要な前段

階として、子どもの思いを丁寧に酌み、仲間をみつめる姿に寄り添うこと、また友だちに対してプラスのイメージがもてるよう配慮することの必要性が示唆された。

(3) 気の合う友だちと相互のかかわりをもつ

友だちに関心をもち、気の合う友だちをみつけると、その隣りに座って遊びながら、時々目を合わせて笑い合ったり、自分の遊びのイメージの中の言葉を伝え合うなど、友だちと直接的にかかわる姿がみられるようになる。楽しくおしゃべりができる仲間、からだを使ってダイナミックに遊べる仲間、ブロックをしながら時々かかわるのが心地よい仲間など、教室には自然と様々な仲間集団ができていく。このような「友だちに近づく」場面は、ある時期を過ぎると継続してみられるようになる(表3)。子どもたちは、友だちと相互にかかわりながら、楽しい、うれしいといったプラスの感情を繰り返す経験し、そういった経験が、再びかかわりを生む、というような相互作用のプロセスが期待される。

(4) 友だちとのかかわりの中で葛藤場面を経験する

友だちとの直接的なかかわりが増えることによって、友だちと自分の思いがぶつかる場面がでてくる。「友だちと対立する」場面は、入園当初は全く見られなかったが、友だちに近づき、直接かかわる経験を繰り返す中で、徐々にみられるようになる(表3)。自分の思い通りにならないというような葛藤は、大人とのやりとりの中ではなかなか味わうことはできないと考えられ、幼稚園という同年齢集団の中で、初めて経験する子も少なくない。そのため、思いを言葉で伝えることができず泣いてしまったり、伝えるのをあきらめて我慢することも多かった。しかし、それでも友だちにかかわろうとしていく3歳児の姿から、友だちとのいざこざで味わうつらさ、苦しさ以上に、友だちと一緒にいる

表3 カテゴリー分布

時間 ↓	保育者と 関係を築く	友だちに 関心をもつ	友だちに 近づく	友だちと 対立する
	●			
	●			
		●		
	●			
	●			
		●		
		●		
		●		
	●			
		●		
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
			●	
	●			
				●
				●
				●
			●	
			●	

こと、一緒に遊ぶことに、子ども自身が魅力を感じていることが示唆された。

また3歳児はきょうだいの有無や第1子であるかなどによって、生活経験が異なったり、言葉の発達の違いが大きいのが、保育者のていねいななかかわりによって、自分の思いが伝えられる経験をしていくことが大切である。いざこざをやめさせるのではなく、葛藤場面での子どもの育ちを考慮しながら、先を見通した支援をしていく必要性が示唆された。

IV 今後の課題

本論では3歳児の調査結果について考察をすすめたが、仲間関係が活発になる4歳児の調査結果とあわせ、子どもの仲間関係の発達の様相を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- 松丸英里佳 (2006) 子どもの居場所に関する研究—多様化する児童館の役割についての考察—, 埼玉大学教育学部 卒業論文
- 岡田有司 (2008) 児童期から青年期の移行と放課後における活動, 心理科学, 28-(2), 15-27
- 吉川はる奈 (2008) 学級と学童保育で行う特別支

援教育 ちょっと気になる今どきの小学生, 金子書房, 110-125, 西本絹子編

- 川井 尚, 恒次欽也, 大藪 泰, 金子 保, 白川園子, 二木 武 (1983) 乳児—仲間関係の縦断的研究1—初期の発達的变化, 小児の精神と神経, 23, 35-42
- 井上健治, 久保ゆかり (1997) 子どもの社会的発達, 東京大学出版会
- 無藤隆, 内田伸子, 斉藤こずえ (編) (1986) 子ども時代を豊かに 新しい保育心理学, 学文社
- 木下芳子, 朝生あけみ, 斉藤こずえ (1986) 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達—3歳児におけるいざこざの発生と解決, 埼玉大学紀要教育科学, 35, 1-15
- 野尻裕子 (2000) 幼児にとって相手と「繋がる」ということ—うまく繋がることのできない3歳児の1事例から—, 保育学研究, 38 (2), 20-27
- 高坂 聡 (1996) 幼稚園児のいざこざに関する自然観察的研究: おもちゃを取るための方略の分類, 発達心理学研究, 7 (1), 62-72
- 倉持清美 (1992) 幼稚園の中のものめぐり子ども同士の間いざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係, 発達心理学研究, 3 (1), 1-8
- (2008年9月24日提出)
- (2008年10月17日受理)

Research on process of development related to three-year old child's companion

Erika MATSUMARU and Haruna YOSHIKAWA

Keywords : companion relation, three-year old child, observational research, process of development

There are a lot of people who point out uneasiness to the appearance that the school child plays with the friend. It is because it is difficult to become a one-sided relation of attacking the other party well in the self-control, and to understand mutually. "Companion" is the one that the age is in the vicinity, the body, psychologically, and socially in a similar standpoint with oneself. It is said that mutual negotiation with the companion will play a major role for the children's social development.

The purpose of this research is to do the observation investigation of the three-years old children who participate in the social aggregation of kindergarten for the first time, and to clarify the process of development related to the companion. It is based, and the suggestion of the development of child's interpersonal relationship in the puerility and youth is obtained.

The feature of the process of development related to three-years old child's companion is as follows. (1) Feelings are stabilized by relations with those who take care of a child. (2) It is interested in the friend, and it knows friend's appearance. (3) It has relations of each other with the friend whom the nature suits. (4) The conflict scene is experienced in relations with the friend.